資料５

第 62 回渡良瀬遊水地野鳥観察会（遊鳥会）定例会資料

（平成 28 年 1 月 16 日）

あけましておめでとうございます。遊水地に鳥が少ないようですが、いかがお過ごしになりましたか？

前回（12 月 19 日）は、谷中ブロックの北岸を谷中湖の水鳥を見ながら東に進み、東谷中橋を渡って地内水路を谷中橋に向かい、谷中橋を渡って昨年改修工事が施工された水路を見ながらウォッチングタワーを経て、出発点の子供広場に到りました。出現種数は 28 種で少なかったと思います。昨年同期とコースが違いますので比較は出来ませんが、昨年（平成 26 年 12 月 20 日）は谷中湖を回って 45 種、種により個体数が少なかったと記録されています。今回は、逆光で北西風も強かったのですが、水鳥は「カンムリカイツブリ、カイツブリ、カワウ、マガモ、カルガモ、オナガガモ、ヒドリガモ、ミコアイサ、セグロカモメ、ダイサギ、アオサギ」の 11 種だけでした。昨年は「カンムリカイツブリ、ハジロカイツブリ、カイツブリ、カワウ、マガモ、カルガモ、コガモ、ヨシガモ、オナガガモ、ヒドリガモ、ミコアイサ、オオバン、クイナ、セグロカモメ、アオサギ、」の 15 種でした。

ちなみに、平成 17 年の谷中湖の干し上げに係る国交省の調査結果を見ると、12 月 20 日では、「マガモ（1588 羽）、カルガモ（1217 羽）、コガモ（152 羽）、ヨシガモ（3 羽）、オカヨシガモ（11 羽）、ヒドリガモ（681 羽）、アメリカヒドリ（1 羽）、オナガガモ（2 羽）、ホシハジロ（4 羽）、スズガモ（4 羽）、ミコアイサ（9 羽）、カイツブリ（16 羽）、カンムリカイツブリ（66 羽）、カワウ、（204 羽）、ダイサギ（1 羽）、アオサギ（9 羽）、オオバン（2 羽）、ユリカモメ（1 羽）、セグロカモメ（3 羽）で、合計 19 種（3974 羽）とあります。なお、その一連の調査の最高値は、平成 18 年 1 月 24 日の 25 種（8365 羽）でした。

また、私たちが平成 23 年 2 月 19 日に行なった、干し上げが進行中の谷中湖での水鳥調査では、「マガモ（2594 羽）、カルガモ（459 羽）、ハシビロガモ（10 羽）、コガモ（126 羽）、オナガガモ（29 羽）、ヒドリガモ（341 羽）、キンクロハジロ（1 羽）、カンムリカイツブリ（4 羽）、カイツブリ（6 羽）、カワウ（226 羽）、コサギ（1 羽）、ダイサギ（19 羽）、アオサギ（38 羽）、セグロカモメ（14 羽）、ユリカモメ（8 羽）、ミサゴ（2 羽）」で合計 16 種（3877 羽）でした。

今季も水鳥は少なく、2,000 羽前後と思いますが、ここ数年の水鳥特にカモの仲間の減少傾向をどのように考えたらよいでしょう？昔は鴨猟の解禁前には、空が隠れるほどにして飛んだのですが・・・。渡良瀬遊水地だけの問題ではないと思いますが、早い時期にきっちりした調査をしておく必要を感じます。また、渡良瀬遊水地の 1 つの対策として、浮島を増設すると良いと思います。渡良瀬遊水地は、ラムサール条約登録時、基準 5 の「定期的に 2 万羽以上の水鳥を支える湿地」に該当しませんでした。第二調節地の湿地再生事業も合わせ、条約の真の理念に向けての取組が望まれます。

鳥便り　この冬は野鳥が少ないという声があちこちで聞かれます。昨季も種数は揃うが種別の個体数が少ないと言われていましたが、今季ほどではなかったと思います。昨年の 11 月以降、平年を上回る暖かさが続き、山地や北の方でも採餌に差し支えなく、山を下りたり南に移動する必要がないのでしょうか？昆虫は少なめで、木の実・草の実の稔りはいまいち、と聞いていたのですが・・・。数年前にもこれほどではありませんでしたが、カシラダカが東北から南下して来なかったり、渡来したツグミが山を下りるのが遅れたりした冬がありました。

渡良瀬遊水地に限って言えば、昨年 2 月 15 日夜間の降雪によってヨシが倒れ、それ以降チュウヒがねぐらを変更しましたね。4 月 8 日にも記録的に遅い降雪があり、その後の低温によって、芽吹いたばかりのヨシやスゲが枯れかかって黄色くなったりもしました。それでもオオセッカは 19 羽の♂のさえずりがカウントされ無事が確認されました。更に 9 月 11 日の豪雨があり、水が引いた後もヘドロが乾いて張り付き、草の実などの採餌は困難になったと思われます。また、穴居生活をするハタネズミはあの大水をどのようにしてやり過ごしたのでしょう。チュウヒやハイイロチュウヒ、ノスリ、コミミズクの渡来数の大幅な減少はその辺に原因があるのかもしれません。

それと、例年、夕暮れ時に、遊水地付近から南東方向に向うハシブトガラス、ミヤマガラスなどの大きな群れが見当たりませんが、皆さんお気づきですか？ハクチョウ 2 種は北エントランス西の沼に来ています。

（アオジ・真瀬）

（オオハクチョウ・真瀬）

（ホオジロ・真瀬）

（タゲリ・真瀬）

（トモエガモ・木村）

（ハイイロチュウヒ、チュウヒ・関口）

（ハシビロガモ雌雄・五十畑）

（ベニマシコ・真瀬）

（参考・ヘラサギ、クロツラヘラサギ
撮影沖縄・小峯）

今回はねぐら入りをするチュウヒをカウントします。事前調査ではねぐら入りするチュウヒの数は、例年の半分以下で、誤差は少ないと思いますので、翌早朝のねぐらを出るチュウヒの確認調査は行ないません。

ねぐらは、「オオセッカの繁殖地の東西」になっています。東組みと西組みの 2 班に分かれてください。カウンターを使って数えます。調査エリアが隣接しています。担当するエリアを通過してしまうものはカウントしないで下さい。もう何度も経験なさっている方はご承知でしょうが、一旦ねぐらに入ったものが、上空を旋回する仲間に刺激されたりして再び舞い上がることがあります。ダブルカウントしないように注意してください。チュウヒのねぐらの近くにハイイロチュウヒ♂のねぐらがあり、カメラマンが大勢待機しています。車は他の車にならって片側に寄せて止めてください。3 時に待機、調査終了は 5 時 10 分頃になります。

2 月定例会（2 月 20 日）は干し上げのすんだ谷中湖の水鳥を中心に観察します。湖畔林の小鳥達も観察できます。例年と比較しながら観察しましょう。

3 月定例会は第 3 土曜日がヨシ焼きなので、第 2 土曜日（12 日）に変更し、チュウヒの繁殖調査をします。

（一色）